OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	放課後の高校生 : 現代の高校生の意識・行動を規定する要因の考察
Author(s)	片山, 悠樹
Citation	大阪大学教育学年報. 2005, 10, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10981
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学教育学年報 第10号（2005年）
Annals of Educational Studies Vol .10

放課後の高校生
—現代の高校生の意識・行動を規定する要因の考察—

片 山 悠 樹

【要旨】

これまで高校研究において，「トラッキング・システム」（tracking system）に大きな関心がよせられてきた。1970年代から80年代にかけて，高校生の意識・行動は「トラック」により，分化していた。しかし，高等教育のユニバーサル化を迎えているいま，高校生の意識・行動に関する「トラッキング」に変化が生じていると考えられる。

そこで本稿の目的は，1）現代の高校生の意識・行動において，高校格差という「トラッキング」がどのように関与しているのか，2）かりに，かれらの意識・行動に関して「トラッキング」の影響力が弱まっているならば，どういった要因の影響力が肥大しているのか，これらを分析する。そして，分析結果にもとづいて，現代の高校生の意識・行動の分化のメカニズムについて，一つに視座を提示することを試みる。なお，分析に際して本稿で注目するのは，高校生の「放課後の過ごし方」である。

I. 問題の所在

これまで高校研究において，「高校格差」に大きな関心がよせられていた。とりわけ1980年代以降，「高校格差」がもつ選抜機能を中心に研究が進展してきた（耳塚1993）。高校生の進路は高校ランクや学科によって大きく異なることはよく知られた事実である。「高校格差」という存在は，高校生の進路選択の機会や範囲を限定していた（藤田1980）。そればかりではない。高校生の意識・行動にもあきらかな「格差」が生じるようになった。たとえば，生徒文化に関する研究があげられよう。これらの研究では，高校格差のなかで上位校の生徒たちは学校に適応的，肯定的な生徒文化を形成し，それに対して，下位校の生徒たちは反抗的，逸脱的な生徒文化を形成していると実証されてきた（米川1978など）。当時，高校生の意識・行動は，「高校格差」にもとづいて分化していたのである。

こうした「高校格差」のあり方は，高校生の将来的な社会的・職業的地位獲得に関連づけて，一般的に「トラッキング・システム」（tracking system）とよばれてきた。高校生たちの前には「トラック」（格差）が用意されており，かれらはあたかも進路変更を許されないランナーのように，そのうえを走りつづけていたのである。

しかし，高等教育のユニバーサル化にともない，かつてと比べると，大学に入ることは容易になっている。希望をすれば誰もが高等教育を受けることが可能になっている，といっても過言ではない。こういったなか，「トラッキング・システム」の概念がいまなお通用するのだろうか，という疑問から比較調査を行った研究もあらわれている（樋田・耳塚・岩木・苅谷2000，尾嶋2001）。そして，卒業後の進路において「高校格差」はいまだ明確であるが，「向学校・向勉強志向および反・脱学校志向の原因のすべてを学校タイプ（あるいはそこから予測される将来の社会的地位）に帰属させることの困難さ」（荒牧2001 69頁）がある，と指摘されている。いまや，高校生の意識・行動に関する「トラッキング」に変化が生じていると考えられる。

そこで本稿では，1）現代の高校生の意識・行動において，「高校格差」という「トラッキング」がどのように関与しているのか，2）かりに，かれらの意識・行動に関して「トラッキング」の影響力が弱まっているならば，どういった要因の影響力が大きくなっているのか，これらを質問紙調査から分析する。そして，分析にもとづいて，現代の高校生の意識・行動の分化のメカニズムについて，一つの視座を提示することを試みる。

分析に際して本稿で注目するのは，「放課後の過ごし方」である。それは，次のような理由による。放

課後の行動は，部活動への参加，まっすぐ帰宅，または遊びにいくなど，高校生の日常的な行動のなかでも，個人の価値観や嗜好がよく反映される。したがって，放課後の過ごし方を扱うことで，多様な高校生の行動様式を示すことができる。また，これまで放課後の過ごし方はほとんど着目されていなかったため，こうした観点を取り上げることにより，見過ごされてきた高校生の意識・行動の分化の規定要因を見出すことが可能となるであろう。なお，放課後の過ごし方を抽出するにあたり，「生活時間（time budget）」の研究を応用する。「生活時間」とは，1日24時間を個人がどのように消費したかという記録である（矢野1995）。それぞれの高校生の具体的な時間の使い方を扱うことにより，かれらの日常性から遊離することなく[1]，実態をより的確に把握することができるであろう。

2. 本稿での枠組み

2．1．トラッキングの弱体化と「高校」観の変化

すでにふれたように，これまで高校生の意識・行動の分化は，トラッキングという枠組みで解明されてきた。その説明図式として注目されてきたのが，地位欲求不満説である（耳塚1980）。

1970年代から80年代にかけて，高校生は「よい学校に入れば，よい会社に入れる」といったように，より高い学歴は社会的な成功の可能性を高めるという関連を強く意識していた。一生懸命勉強して進学することは成功につながる，と信じていたのである。こういった意識の共有が，学歴獲得の競争に参加することを後押ししてきた（苅谷1995）。だが，競争過程において，進学できない高校生は将来的な展望のなかで自らが低い地位にとどまることを予期し，欲求不満の状態に陥っていた。単純化すれば，業績主義的な競争のなかで高校生は「勝者」／「敗者」をみずから認識していたといってよい。こうした状況下で，高校生は高校を，学業成績を基準にして将来の社会的地位が振り分けられる「選抜・配分の場」として捉えていた。

高校が「選抜・配分の場」として捉えられていた時期，上位校の高校生は向学校的な意識・行動を形成していた。そのいっぽうで，下位校の高校生はみずからを「敗者」と認識し，高校へスムーズには適応することはあまりなかった。そして非行・問題行動や「不良」的スタイルなどの反学校的な意識・行動が下位校で多くみられた（秦1984）。

だが，状況は変わりつつある。たとえば，高校生の「高校」の捉え方の変化があげられる。現代の高校生は，高校を「選抜・配分の場」としてよりも，将来的な展望をあまり気にすることなく，いまの学校生活を楽しむことに比重をおく「日常生活の場」として捉えている（片山2004）。その背景には，かれらは学歴獲得の競争に動員されにくくなっている（堀2000）ことが関係している。そして，非行・問題行動において，高校ランク・タイプによる差がみられなり，地位欲求不満説が必ずしも有効でなくなっている（秦他2004）。

そうした変化のなか，現代の高校生の意識・行動の分化に，トラッキングの影響力は弱まっている可能性がある。本稿の第一の分析課題は，かれらの放課後の過ごし方において，高校格差というトラッキングの影響力が弱まっているのかを実証することである。

2．2．学校への「親和性」の肥大化と形成過程

トラッキングの影響力が弱まっているならば，どういった要因の影響力が大きくなっているのか。

地位欲求不満説にみられるように，これまで意識・行動の分化の規定要因として主に扱われたのが，「進学校」－「非進学校」，「成績がよい」－「成績がよくない」などの学業成績である。だが，学業成績という軸だけでは見過ごされてきた分化の規定要因があるのではないか。とくに，高校を「日常生活の場」と捉えている現代の高校生にとって，学業成績以外の要因が影響を及ぼしているのではないだろうか。

かつてリストは，生徒たちの行動や自己認識はどのようにつくられるのか，ラベリング理論にそのプロセスの解明を求めた（Rist, R.C 1977=1980）。そして，生徒たちはたえず教師から評価を受け，しだいに評価にそった行動をふるまうようになると論じている。もちろん，教師からの評価は学業成績にかぎられ

ない。学校での日常生活を思い浮かべればあきらかなように，学校行事に熱心に取り組む生徒は，教師から「がんばっている生徒」とよい評価を受け，こういった活動に熱心でない生徒は，「がんばりが足りない生徒」とよくない評価を受ける。学校では「生徒指導」があるように，生徒たちは教師から学業成績以外の評価を受けていることは想像できる。

そうなると，教師から肯定的な評価を受けやすい態度や意味づけを示す生徒たちと，そうでない生徒たちでは，意識・行動の違いが生じてくる。つまり，学校での活動に対する態度や意味づけが，現代の高校生の意識・行動の分化の規定要因となっていると考えられる。

そうした態度や意味づけを，本稿では学校への「親和性」とよぶことにする。ここでいう「親和性」とは，個人がある対象にどのような意味をみいだすかといったように、個人にもとづいた概念ではあるが、個人の性質によるものではない。それは，学校や家庭などの社会組織に規定され，その結果として表出する概念である。本稿では学校への「親和性」としているため，生徒個人が学校での活動にいかなる意味をみいだし，どういった態度を示すか，ということになる。

だが，「親和性」が生徒たちに及ぼす影響は，高校だけにとどまらない。さきにみた「生徒指導」の文脈でいえば，そうした指導は小学校から行われており．しかも概して高校よりも中学校，中学校よりも小学校のほうがそのウェイトは高い。したがって，「親和性」は高校入学以前から，生徒の意識・行動に影響を及ぼしている可能性がある。意識・行動の分化は学校への「親和性」にもとづいて，すでに小学校から起こっており，そして中学校，高校でも持続的に影響しているのではないだろうか。

以上のように，現代の高校生の意識・行動の分化において，トラッキングの影響力が弱まっているならば，学校への「親和性」という要因の影響力が肥大化しているのではないか。さらに，その影響は小学校からはじまっていると考えられる。そこで本稿の第二の分析課題は，放課後の過ごし方において，トラッキングの影響力が弱まっているならば，学校への「親和性」の影響が肥大しているのか，そしてどのような分化のパターンがみられるのか，これらを小・中学校の回顧的なデータと高校でのデータを用いて，検討することである。

2．3．青年文化の侵略

さらに，学校への親和性以外の要因の影響力も大きくなっている。とりわけ，学校外の要因は見逃せない。ここでは青年文化を手かがりにみてみたい。

かつて高校生は学校と家庭で1日のほとんどの時間を過ごし，学校の外の活動が活発ではなかった。「ひよわな若者文化」（Rohlen，T 1983=1988）と形容されていたように，高校生は青年文化にあまり接触していなかった。その背景には，2つの条件があげられる。1点目は，高校生が「享楽的」な青年文化に染まらぬため，高校には青年文化の侵略を阻止する学校文化が形成されていた点である。こうしたことは，服装や髪型など，こと細かに規定された校則に反映されている。高校は生徒たちに「高校生にふさわしい姿」を強調し，指導していたのである。2点目は，当時の高校生は，「いまがんばれば，将来いいことがある」という意識を共有していたため，青年文化に対して禁欲的であった点である。かれらは学校の外に魅力的なことがあったにもかかわらず，学校のなかで禁欲的にがんばっていた。かつての生徒文化は学校文化からは多大なる影響を受けていたが，それに比べれば，青年文化の影響力は大きくはなかった。青年文化と学校文化との間には境界が存在していたといえよう。

しかし，いまの学校生活を楽しむことを重視する現代の高校生にとって，「将来のために，いまはがんばる」必要性は感じられなくなっている。かれらの関心は，卒業後に自分たちがつくであろう社会的地位ではなく，いま自分たちが楽しいか否かである（伊藤2002）。そして，かれらは「享楽的」な青年文化にためらいなくコミットするようになっている。近年のインターネットや携帯電話などの急速な普及や，高校生の消費活動の増大という現象は，このことをあらわしている。その結果，青年文化は学校文化に侵略し，かつてみられた2つの文化の境界は曖昧になりつつある。青年文化が現代の高校生に与える影響力は肥大化していると考えられる。そこで本稿の第三の分析課題は，放課後の過ごし方において，青年文化の影響力を実証することである。

次章からの具体的分析においては，高校生の放課後の過ごし方を，部活動の参加の有無，帰宅時間，学校外学習時間を用いて類型的に把握する。そのうえで，それぞれの類型がどのように分化しているのかを，本章の枠組みに沿って検討していく。

2．4．使用したデータと分析の手続き

本稿で使用するデータは，2001年に大阪大学大学院人間科学研究科教育計画学・教育病理学分野の研究グループが山梨県1校，大阪府8校，奈良県・福岡県・長崎県・鹿児島県各2校の計17校の高校1･2年生を対象に実施した「高校生の生活意識に関する調査」である。調査対象は公立高校で，総サンプル数の3069人である。調査方法は、各高校を通した質問紙による集合調査法で、各高校の教師によって配布、実施された。学科・コースは多様であるため、授業内容に応じ、普通科、英語科、農業系学科、産業系学科に分け、その結果、普通科74.1％、英語科3.4％、農業系学科4.4％、産業系学科18.1％となった。本稿では，総サンプル数のなかから，生活時間の記載があったサンプルのみを使用した。その結果，サンプル数は2590人となった。分析に用いる指標は，以下の通りである。

まず高校ランクは，中学校の学業成績（成績上位から5 - 4 - 3 - 2 - 1の順である）を基準にして，便宜的に5段階に分けた。中学校の学業成績が平均して4.71～4.65の高校は，最上位であるランクⅠ，つづいて，4.07～3.92の高校はランクⅡ，3.68～3.26の高校はランクⅢ，2.76～2.47の高校はランクⅣ，いわゆるかつての職業高校である専門校はランクⅤとした。次に，学校への「親和性」に関しては，ハーシのボンド理論を応用した。本稿では，ボンド理論のなかでも，他者に抱く愛着・尊敬である「アタッチメント」と，合法的な活動への参加という「インボルブメント」の2つをとりあげた（Hirschi 1969=1995）。具体的な指標としては，「学校に好きな先生がたくさんいる」，「給食・掃除・日直など，当番の仕事をきちんとする」，「先生に言われたことは必ず守る」，「学校の行事に積極的に参加する」，「みんなで団結して何かをするのが好きだ」，「学校の授業がよくわかる」，そして「宿題（予習・復習）を，いつもやってくる」である。なお，学校への「親和性」に，ハーシのボンド理論を応用した理由は，ボンド理論は個人が「下からの作用として」社会に結びつくという個人を軸とした概念であり，「親和性」の概念に近いためである。また，青年文化に関しては，流行に対する意識や携帯電話に関する項目を中心に取り上げる。具体的には，「おしゃれに興味がありますか」，「髪型を変えるとき，流行を気にしますか」，「自分の着る服について流行を気にしますか」，「携帯電話またはPHSを持っていますか」，そして「飲食・ショッピングをしますか」である。

3. 放課後の高校生の状況[2)]

さて，高校生が放課後どのように過ごしているのか，について検討したい。とはいえ，放課後の過ごし方とひとくちにいっても，さまざまである。そこで，放課後の過ごし方を類型的に把握していく。

3．1．指標の設定

本稿では，部活動の参加の有無，帰宅時刻，そして学校外学習時間（以下，勉強時間）をもとに，以下の手順で便宜的に6つに類型化した。

まず，部活動への参加をもとに，放課後，部活動を行う生徒と行わない生徒に分けた。次に，部活動を行わない生徒については，その帰宅時刻から，18時を基準に，まっすぐ帰宅する生徒（18時以前に帰宅）と外で遊んでから帰宅する生徒に分けた。さらに，帰宅後の生活においては，勉強時間をもとに2時間以上勉強する生徒としない生徒に分類した（図1）。

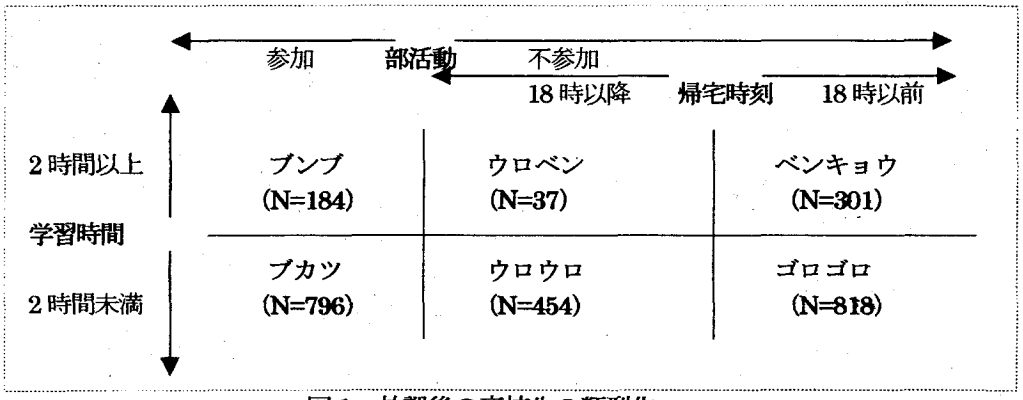


図1　放課後の高校生の類型化

これら6類型を本稿では，以下のように名づけ，それぞれの特徴を分析する。
・部活動に参加し，勉強時間が2時間以上の生徒：文武両道をもじって「ブンブ」
・部活動に参加し，勉強時間が2時間未満の生徒：「ブカツ」
・部活動に参加せずに帰宅し，勉強時間が2時間未満の生徒：「ゴロゴロ」
・部活動に参加せずに帰宅し，勉強時間が2時間以上の生徒：「ベンキョウ」
・部活動に参加せず，買い物や外で遊んでから帰宅し，勉強時間が2時間未満の生徒：「ウロウロ」
・部活動に参加せず，買い物や外で遊んでから帰宅し，勉強時間が2時間以上の生徒：「ウロベン」（ウロウロ＋ベンキョウ）

3．2．放課後の過ごし方

どのように過ごしているのか，具体的にみてみよう。ここで主に用いるのは，部活動の時間，遊びや買い物の時間，勉強時間，テレビ・ゲーム・音楽の時間，家での自由時間（何もしない，ボーッとする，ごろごろしている，といった時間）と帰宅時刻，就寝時刻である。

図2は，類型ごとの放課後の過ごし方を平均時間からみたものである。図をみると，ブンブとブカツは，どちらも放課後2時間半ほど部活動を行い，7時頃に帰宅している。しかし，帰宅してから両者の違いがあらわれる。ブンブは勉強に多くの時間を費やしているため，家での自由な時間や睡眠時間が短い。それに対して，ブカツはテレビ・ゲーム・音楽や自由な時間など，比較的ゆとりのある時間を過ごしている。

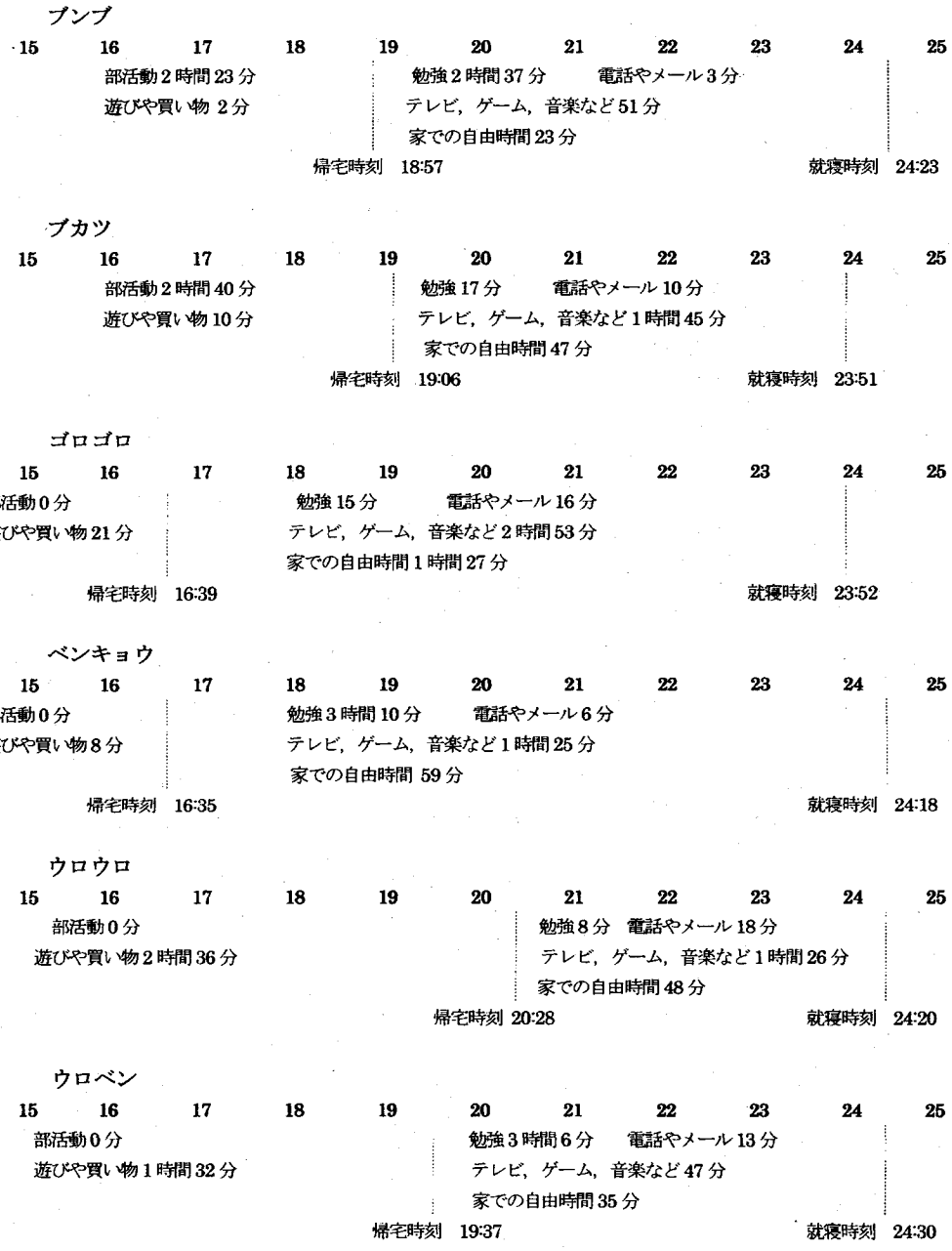
ゴロゴロとベンキョウは，まっすぐ帰宅しており，その帰宅時刻は16時半頃である。ゴロゴロは帰宅してから，テレビ・ゲーム・音楽や家での自由時間が他の類型と比べてかなり長くなっている。ここでは表は省略したが，ゴロゴロが「何もしないでのんびりする」という質問に「よくする」，「ときどきする」と回答した割合は他の類型と比べて，高くなっている。かれらは，学校が終わってからゆとりのある時間を過ごしているといえよう。いっぽう，ゴロゴロと同様，まっすぐ帰宅したベンキョウは，勉強に費やす時間がもっとも長くなっている。

ゴロゴロとベンキョウとは対照的に，ウロウロとウロベンは学校が終わってから，まっすぐ帰宅せずに，遊びや買い物など外で過ごす時間が長い。ただ，ウロウロに比べると，ウロベンは遊びや買い物に費やす時間が短く，帰宅時間も1時間ほど早くなっている。ウロウロは帰宅してから，テレビ・ゲーム・音楽や自由な時間を過ごしているが，ウロベンは帰宅してからは勉強に多くの時間を費やしている。ここでも表は省略したが，ウロウロは「アルバイトをすることがありますか」という質問に対して「よくする」，「ときどきする」と回答した割合は，他の類型と比べると目立って高い。かれらは，遊びや買い物に必要なお金をアルバイトで稼いでいるのではないだろうか。

以上のように，高校生の放課後の過ごし方をみてきたが，かれらの日常性はかなり多様である。そのな

かでも，ゴロゴロに注目すると，かれらは学校が終わるとまっすぐ帰宅する。かれらの過ごし方は，「地味」なように思える。確かに，ウロウロやウロベンのように，放課後に外で遊びに行く生徒もいる。しかし，ゴロゴロの実数がもっとも多いことからもわかるように，いまの高校生の日常性は意外に「地味」なのかもしれない。

図2　放課後の過ごしかた



4. 放課後の高校生に関する分析

これまでみてきた高校生の放課後の過ごし方に，どのような要因が関与しているのか。ここでは，2章で述べた枠組みにそって検討したい。なお，ウロベンは実数がきわめて少ないため，ブンブ，ブカツ，ゴロゴロ，ベンキョウ，そしてウロウロの5つを中心に分析する。

4．1．高校ランクと6類型

まずは，6類型と高校ランクとの関係からみてみる。はたして現代の高校生の意識・行動に関して，高校ランクによる対応関係はみられなくなっているのであろうか。

表4－1をみると，ベンキョウではランクⅠから順に29.7，12.0%，10.9%，8.8%，そして5.5%と，上位校ほどベンキョウの割合が高くなるという高校ランクによる明確な対応関係がみられる。次にゴロゴロについてみると，ランクⅡ～Ⅴでは全体の3分の1程度の割合を占めており，ランクⅠだけが10.0%と低くなっている。いっぽう，ブンブについては，ゴロゴロとは反対に，ランクⅠが27.8%と高く，その他のランクでは1割にも満たない。つづいてブカツをみると，高校ランクによる対応関係はみられない。さらにウロウロでは，ランクⅠで6.6%ともっとも低い割合であり，ランク「Ⅱ、Ⅳ、Ⅴでは2割を越えている。

ベンキョウに示されているように，高校ランクによる対応関係はみられるが，その他の類型では高校ランクにもとづいた差は明確ではない。高校生の放課後の過ごし方に関して，高校格差の影響力は部分的なものであり，弱体化しているといえよう。

表4－1　高校ランク×6類型　　単位：%

6類型 / 高校ランク	ブンブ	ブカツ	ゴロゴロ	ベンキョウ	ウロウロ	ウロベン	合　計（N）
ランクⅠ	27.8	21.2	10.0	29.7	6.6	4.6	100.0(259)
ランクⅡ	4.8	23.9	35.9	12.0	20.1	3.3	100.0(209)
ランクⅢ	6.5	37.1	32.5	10.9	12.1	0.9	100.0(1210)
ランクⅣ	2.1	27.7	33.4	8.8	27.0	1.0	100.0(512)
ランクⅤ	3.0	25.0	38.3	5.5	27.8	0.5	100.0(400)
合　計	7.1	30.7	31.6	11.6	17.5	1.4	100.0(2590)

4．2．「親和性」の累積的影響

では，6類型と学校への「親和性」の関係を，表4－2～4－4からみてみる。

表をみると，ブンブは小学校の頃から高校まで「当番の仕事をきちんとする」，「先生に言われたことは必ず守る」、そして「みんなで団結して何かするのだ好きだ」に対して肯定的に回答している割合が高い。それだけではない。中学校と高校では「学校の行事に積極的に参加する」や「宿題をいつもやってくる」までも肯定的な反応を示している。

次に，ブカツをみると，肯定的な親和性を示している項目が目立っているが，ブンブとはやや異なった傾向である。ブカツは，中・高校を通じて，学校の行事への参加や団結することに肯定的な反応を示している。そのブカツと対照的なのが，ゴロゴロである。かれらは，小学校の頃から，行事への参加や団結することに積極的な態度を示していない。

また，ベンキョウについてみても，肯定的な反応をしている項目が目立つ。かれらはとくに，当番の仕事，授業，そして宿題に対して，小学校から肯定的な態度である。そして，このベンキョウと対照的なのが，ウロウロである。かれらは，小学校から一貫して，当番の仕事をすることや先生の言うことを守ることに肯定的でない。

表4－2　6類型×学校への「親和性」（小学校）　単位：%

6類型 / 親和性（小学校）	好きな先生がたくさんいる	当番の仕事をきちんとする ※※	先生に言われたことは必ず守る ※※	学校の行事に積極的に参加する ※※	みんなで団結して何かをするのが好き	学校の授業がよくわかる ※※	宿題（予習・復習）をいつもやってくる ※
ブンブ	70.1 (30.4)	**97.3** **(69.0)**	**89.2** **(52.2)**	79.9 (46.2)	76.1 (42.4)	**89.7** **(60.9)**	52.8 (33.2)
ブカツ	69.6 (27.1)	90.3 (57.8)	83.3 (39.8)	75.6 (39.1)	74.6 (33.8)	79.1 (45.4)・	46.2▼ (25.6)
ゴロゴロ	62.4 (22.2)	89.4 (53.7)	80.5 (37.3)	68.2▼ (32.5)	68.0 (31.7)	75.5▼ (36.9)	50.6 (24.4)
ベンキョウ	66.7 (29.2)	93.7 (60.1)	**89.0** **(45.5)**	70.4 (40.2)	69.5 (35.9)	**85.1** **(50.2)**	**59.5** **(32.6)**
ウロウロ	61.6 (23.1)	83.3▼ (53.1)	74.9▼ (32.6)	76.3 (43.0)	70.1 (36.8)	76.7 (41.0)	49.1 (24.0)
ウロベン	75.6 (27.0)	97.3 (27.0)	91.8 (48.6)	89.1 (40.5)	70.2 (37.8)	89.1 (48.6)	59.4 (40.5)
合　計	65.8 (25.4)	89.8 (56.9)	82.1 (39.4)	73.4 (38.3)	71.2 (34.6)	79.1 (44.5)	50.3 (26.5)

※※：$p<0.01$　※：$p<0.05$　ゴシック体は占有率が高い場合を，▼は低い場合を示す
数値は「とても」と「やや」当てはまるをたしたもの　（ ）内の数値は「とても当てはまる」

表4－3　6類型×学校への「親和性」（中学校）　単位：%

6類型 / 親和性（中学校）	好きな先生がたくさんいる	当番の仕事をきちんとする ※※	先生に言われたことは必ず守る ※※	学校の行事に積極的に参加する ※※	みんなで団結して何かをするのが好き ※※	学校の授業がよくわかる ※※	宿題（予習・復習）をいつもやってくる ※※
ブンブ	67.4 (26.1)	**90.2** **(51.6)**	**80.4** **(31.5)**	**78.8** **(44.6)**	**79.3** **(41.8)**	**89.6** **(47.8)**	**51.7** **(20.7)**
ブカツ	62.5 (21.5)	80.3 (41.8)	73.7 (21.1)	**72.0** **(35.4)**	**73.7** **(34.4)**	69.1 (20.2)	37.2 (8.8)
ゴロゴロ	56.6 (20.8)	78.5 (37.8)	69.6 (17.2)	61.0▼ (24.8)	64.6▼ (29.1)	53.4▼ (16.5)	37.0 (7.8)
ベンキョウ	65.4 (25.9)	**88.7** **(46.5)**	**81.8** **(29.6)**	66.1 (31.2)	69.8 (31.6)	**77.1** **(34.9)**	**53.8** **(16.3)**
ウロウロ	57.2 (17.8)	73.2▼ (33.3)	57.1▼ (15.2)	68.5 (35.2)	71.5 (39.6)	59.3▼ (20.3)	31.2▼ (8.1)
ウロベン	56.7 (24.3)	89.2 (54.1)	86.5 (27.0)	78.3 (29.7)	70.2 (39.6)	84.6 (37.8)	59.4 (21.9)
合　計	60.3 (21.5)	81.1 (40.5)	71.1 (20.7)	67.8 (32.1)	70.3 (33.9)	68.3 (23.0)	39.4 (10.3)

※※：$p<0.01$　※：$p<0.05$　ゴシック体は占有率が高い場合を，▼は低い場合を示す
数値は「とても」と「やや」当てはまるをたしたもの　（ ）内の数値は「とても当てはまる」

表4－4　6類型×学校への「親和性」（高校）　単位：%

6類型 / 親和性（高校）	好きな先生がたくさんいる※※	当番の仕事をきちんとする ※※	先生に言われたことは必ず守る ※※	学校の行事に積極的に参加する ※※	みんなで団結して何かをするのが好き ※※	学校の授業がよくわかる ※※	宿題（予習・復習）をいつもやってくる ※※
ブンブ	**44.5** (**10.3**)	**86.9** (**38.0**)	**81.0** (**19.6**)	**68.5** (**27.2**)	**75.5** (**34.2**)	**57.0** (**9.2**)	**58.7** (**8.7**)
ブカツ	36.7 (6.2)	**75.3** (**27.4**)	66.9 (11.9)	**64.1** (**22.4**)	**71.1** (**31.2**)	47.0 (5.2)	28.7▼ (3.8)
ゴロゴロ	29.8▼ (3.9)	66.4 (25.9)	58.7 (9.8)	44.2▼ (11.9)	53.2▼ (17.7)	45.3 (6.9)	28.1▼ (3.7)
ベンキョウ	**44.2** (**9.6**)	**81.7** (**35.5**)	**76.7** (**17.6**)	57.2 (18.3)	64.8 (36.9)	**59.5** (**9.0**)	**58.8** (**10.6**)
ウロウロ	29.9▼ (5.5)	55.9▼ (17.8)	44.5▼ (4.6)	49.8 (16.1)	57.2 (26.4)	36.4▼ (5.1)	18.1▼ (1.8)
ウロベン	40.5 (2.7)	67.5 (29.7)	67.6 (8.1)	56.7 (27.0)	64.8 (32.4)	45.9 (5.4)	51.3 (10.8)
合　計	34.8 (6.0)	70.5 (27.0)	62.5 (11.1)	54.7 (17.9)	62.5 (25.9)	46.7 (6.2)	32.6 (4.6)

※※：$p<0.01$　※：$p<0.05$　ゴシック体は占有率が高い場合を，▼は低い場合を示す
数値は「とても」と「やや」当てはまるをたしたもの　（ ）内の数値は「とても当てはまる」

こうした傾向は，「今までの学校生活の中での，いちばんの『いい思い出』と『いやな思い出』はなんですか」という自由記述にもよくあらわれている。

たとえば，ブンブについてみると，「小学校，高学年のとき，毎日トイレそうじをしっかりしていたら，校長先生や教頭先生，他の先生にほめられたこと。」，「中学3年の時に，勉強ではいつも他のクラスに負けていたけど，体育祭，文化祭，クラスマッチでクラスが団結し，優勝したこと。」など，小・中・高校を通して先生にほめられた，団結して行事をがんばった，委員をしていた，といった回答が多い。

また，ブカツとベンキョウについてみると，ブカツでは「中学の時は合唱祭やいろんな行事でとてもまとまってがんばっていたので，行事のたびに友ダチがふえた」や「高1の時，文化祭や体育祭でみんなで団結してやりとげたこと」，ベンキョウでは「小6の時，掃除をまじめにしていたら，それまで恐かった担任の先生がはじめてほめてくれたこと」や「中1のころから，先生のお手伝いをよくしていたりしたので，先生がかわったときも最初から信頼されていて，いろんな委員をしたこと」となっている。ブカツの場合は，中・高校の時に学校の行事を団結してがんばった，ベンキョウの場合は，小学校から高校まで，委員や当番を積極的に行った，という記述が目立つ。

いっぽう，ゴロゴロやウロウロの場合，うえでみたような記述はほとんどみられない。かれらは，「いい思い出」として友人関係について触れることがほとんどである。むしろ，学校生活での「いやな思い出」の記述が特徴的である。ゴロゴロでは「小学校の高学年の時，集団行動でリーダーシップをとれなくておこられた。」，「中学の部活の練習がきつかったこと」など，小・中・高校と一貫して行事や団体行動に否定的な記述が多くみられる。また，ウロウロの場合では，「小学校のとき，委員会を忘れてて先生におこられたこと」，「中1の時，掃除を一度もしなかったので，先コーがもう学校にくるなとわけのわかなんことを言われた。」と，小学校から高校まで，先生から怒られた，掃除をしていない，提出物をしていない，などの記述がみられる。

以上のように，類型ごとに学校への「親和性」についてみてきた。学校に対する態度は，小・中・高校を通じて，類型ごとに異なっていることがわかる。

4．3．青年文化に対する意識

すでに述べたように，現代の高校生は青年文化の影響を受けていると考えられる。そこで，おしゃれ，髪型や服の流行や携帯・PHSの所持に関して，類型ごとにみてみよう。

表4−5をみると，どの類型でも「おしゃれに興味がある」という質問に対して「とても当てはまる」や「やや当てはまる」と回答した割合が8割近くにのぼっている。また，「服の流行を気にする」という質問に対しても，6割以上が「とても」もしくは「やや」当てはまると回答している。現代の高校生は，全体的に流行に対する意識は高いといえる。さらに，6割以上の高校生が，携帯・PHSをもっており，「飲食・ショッピングをしますか」に対して肯定的に回答している。

類型ごとにみると，ウロウロは他の類型に比べて，流行を気にする割合，飲食・ショッピングをする割合，また携帯・PHSを所持率がとりわけ高くなっている。また参考までに述べておくと，ウロベンもこれらに高い割合で回答している。

いまの高校生は，全体的に青年文化に対する意識は高い。そのなかでも，ウロウロは，青年文化に対してとくに高い意識をもっている。

表4－5　6類型×青年文化　　単位：%

6類型 / 青年文化	おしゃれに興味がある ※※	服の流行を気にする ※※	髪型の流行を気にする ※※	飲食・ショッピングをする※※	携帯・PHSを持っている※※
ブンブ	78.3(28.8)	70.1(13.0)	41.3(7.1)	53.8▼(14.1)	50.5▼
ブカツ	83.1(31.5)	70.4(16.0)	40.7(6.9)	55.8▼(13.8)	64.7
ゴロゴロ	79.1(34.8)	66.4(14.9)	44.2(8.6)	62.5(18.6)	67.4
ベンキョウ	80.4(39.5)	63.2(14.3)	42.6(9.0)	59.5 (15.6)	60.8
ウロウロ	**91.4(53.3)**	**76.5(20.3)**	**55.3(13.9)**	**77.1(31.7)**	**82.8**
ウロベン	89.2(51.4)	73.0(10.8)	48.6(5.4)	**81.0(40.5)**	70.3
合　計	82.7(37.0)	69.3(15.9)	44.7(8.9)	62.2(19.1)	67.3

※※：$p<0.01$　※：$p<0.05$　ゴシック体は占有率が高い場合を，▼は低い場合を示す

数値は「とても」と「やや」当てはまるをたしたもの（　）内の数値は「とても当てはまる」「携帯・PHSを持っている」に関しては，数値は「持っている」である。

5．結語

多くの先行研究が示してきたように，高校生の意識・行動は，高校格差にもとづいたトラッキングにより分化していた。だが，いまの高校生には，この構図は当てはまらなくなってきているのではないか。かりに変化があるとすれば，どのような要因が影響しているのか。本稿では，現代の高校生の意識・行動の分化のメカニズムを，放課後の過ごし方に着目して把握することからスタートした。これまでの知見をまとめることにする。

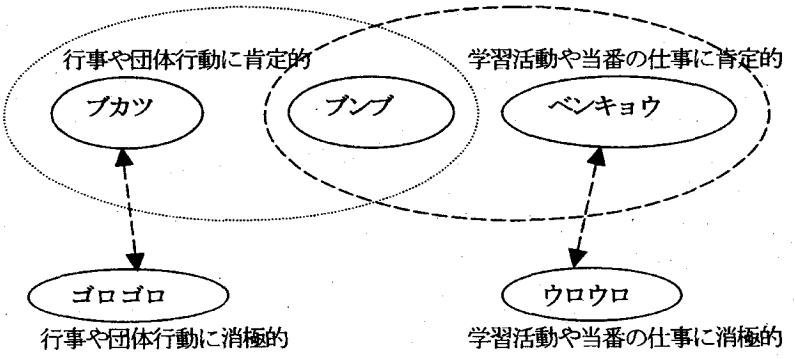
まず，放課後の過ごし方と高校ランクに関してである。ベンキョウのように，高校ランクによる明確な差がみられたが，その他の類型では，明確な差はみられなかった。「輪切り選抜」が存在する以上，高校生の意識・行動に関して，トラッキングの影響力が完全に消滅することはないにしろ，かなり「ゆるやかな構造」になっていることは確かである。

トラッキングの影響力が「ゆるやか」になっているなか，いったいどういった要因が浮かび上がっているのであろうか。ここでは次の二点が考えられる。

第一に，学校への「親和性」である。学校への「親和性」は，高校生の放課後の過ごし方において，影響している。そして，類型ごとに学校に対する態度の示し方は異なっており，図式化すれば図3のようになる。図3にあるように，ブカツは行事などの活動に関して，ベンキョウは学習活動や当番の仕事に関して，とりわけ肯定的な態度である。ブンブは学校のあらゆる活動に肯定的な態度である。いっぽう，ゴロゴロはブカツと対照的であり，ウロウロはベンキョウと対照的である。さらに，図3にみられるパターン

は，すでに小学校からみられ，中・高校を通じてしだいに明確なものとなる。すなわち，学校段階を通して，学校への「親和性」にもとづいて，類型はさまざまなパターンへと分化している。これまで高校生の意識・行動の分化を学業成績の軸だけで捉えていたときには見過ごされてきた，分化の過程があることが示唆された。

図3　類型別にみる「親和性」の分化



第二に，青年文化である。ウロウロにあらわれているように，いまの高校生は青年文化に対する意識が高くなっている。つまり，学歴獲得という目標が喪失すればするほど，「将来のために，いまがんばる」ということよりも，「いまが楽しければそれでいい」といった「享楽的」な青年文化の影響を受けやすくなり，かれらの意識・行動の分化の要因となっているといえよう。

以上の知見から，現代の高校生の意識・行動の分化のメカニズムについで，試論を述べておきたい。これまで高校格差にもとづいたトラッキングにより，意識・行動の分化のメカニズムが示されてきたが，いまの高校生にはそうしたメカニズムだけでは説明できなくなっている。そのいっぽうで，学校への「親和性」や青年文化の影響力が大きくなっている。トラッキング・システムという概念は，もはや有効ではなくなっているのであろうか。

これらを考える際，中西の指摘が参考になる（中西1998）。中西は，女子高校生の進路分化のメカニズムには，学力水準の差異による「アカデミック・トラック」以外に，学力水準の差異では説明できない，ノン・メリトクラティックな「ジェンダー・トラック」が存在していることを提示した。学力水準が反映され易い進路分化においてさえ，ノン・メリトクラティックな「ジェンダー・トラック」という「第2の分化」が存在しているのである。この指摘をふまえると，本稿でみられた学校への「親和性」にもとづく分化は，ノン・メリトクラティックな「第2の分化」と同じように考えられるのではないか。「親和性」による分化は，すでに小学校から生じており，しだいにそのパターンが明確になっている。その過程は，学力水準にもとづかない「トラック」のように機能しているようにみえる。いわば，「親和性によるトラック」といえよう。

いまの高校生の意識・行動の分化において，「親和性によるトラック」という存在が浮かび上がってきている。ただ，「親和性によるトラック」だけで分化のメカニズムの解明をするのは，部分的なものに留まってしまうおそれがある。そういった意味でも，分化のメカニズムの解明において，「アカデミック・トラック」と「親和性によるトラック」とを組み合わせた「二元的なトラッキング・システム」として位置づけしなおし，捉えていくことが有効であろう。さらには，青年文化に象徴されるように，その解明には学校「内」だけではなく，学校「外」の要因にも目を向けることが重要となってきている。

＜注記＞

1）これまで生徒文化研究において，生徒個々人の意識を扱い，生徒文化類型を設定していたため，生徒の日常性から遊離している可能性があると指摘されてきた（麻生1979）。

2）「3.放課後の高校生の状況」については，第11回日本子ども社会学会にて，三戸香代が報告を担当した箇所を，三戸本人の了承を得て，筆者が修正を加えて，執筆した。詳細は，以下を参照のこと。三戸香代・片山悠樹「放課後の高校生」（『日本子ども社会学会第11回大会発表要旨集録』2004年）。

＜参考文献＞

荒牧草平（2001）「学校生活と進路選択―高校生活の変化と大学･短大進学―」尾嶋史章『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 63-80頁

麻生誠（1979）「高等学校教育の発展と高等学校研究の発展」『教育社会学研究』第34集 64-78頁

藤田英典（1980）「進路選択のメカニズム」山村健･天野郁夫編『青年期の進路選択－高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書 101-129項

秦政春（1984）「現代の非行・問題行動と学校教育病理」『教育社会学研究』第39集 59-76項

秦政春・片山悠樹・西田亜希子（2004）「現代高校生にとっての『高校』」『大阪大学人間科学部紀要』第30巻 113-141頁

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著（2000）『高校生文化と進路形成の変容』学事出版

堀健志（2000）「学業へのコミットメント」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 165-183頁

伊藤茂樹（2002）「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』第70集 89-102頁

苅谷剛彦（1995）『大衆教育社会のゆくえ』中公新書

片山悠樹（2004）「現代高校生のストレスと学校要因」『大阪大学教育学年報』第9巻 59-69頁

耳塚寛明（1980）「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集 111-122頁

耳塚寛明（1993）「学校社会学研究の展開」『教育社会学研究』第52集 115-136頁

中西祐子（1998）『ジェンダー・トラック』東洋館出版社

尾嶋史章（2001）『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房

Rist.R. C（1977=1980）「学校教育におけるレイベリング理論」Karabel, J. & Halsey, A. H 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動（上）』東京大学出版会 205-225頁

Rohlen.T（1983=1988）友田泰正訳『日本の高校 成功と代償』サイマル出版

Travis Hirschi（1969=1995）森田洋司・清水新二監訳『非行の原因 家庭・学校・社会のつながりを求めて』文化書房博文社

矢野眞和（1995）『生活時間の社会学 社会の時間・個人の時間』東京大学出版会

米川英樹（1978）「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻 185-208頁

How Do Senior High School Students Spend After-School Hours ? : A Sociological Analysis of Consciousness and Behavioral Pattern among Senior High School Students

KATAYAMA Yûki

There have been many references to 'tracking-system' in the studies on senior high school. In the 1970s and 1980s, the consciousness and behavioral patterns of senior high school students were polarized according to 'track (school-stratification)' . But, such influence of 'tracking-system' would be weaker under the recent situation where the ratio of students going on to a university is rising. Then, what factors will have an effect on the consciousness and behavioral patterns of present-day senior high school students?

The aim of this paper is to clarify the factors that have a close relation to these. In analyzing, I focus on how the students spend after-school hours.

Using date collected from 2590 senior high school students, I conclude as follows. First, the consciousness and behavioral patterns of senior high school students don't necessarily polarize according to 'track (school-stratification). Second, these change in accordance with their 'school-attitude' (more concretely, their involvement in school activities and classes —according to Bond theory) which is continuously shaped throughout their school life. Third, the impact of adolescent culture is increasing.